″なにもない″ 鳥取の魅力

【指導教員】 川井田祥子　木野　彩子

【学　　生】 池田康太朗　磯遊　康孝　井上　明穂　井上　姫　入來　志帆
尾崎　世奈　小田　舞子　佐伯　恵里　下浦　望　白方　欣江
中川　里彩　中村　友紀　花房　璃奈　吉野　紗恵

１．はじめに

私たち「まちづくり班」は、今年度のテーマを「移住」と設定し、文献調査やインタビュー調査を通して鳥取の価値・魅力を知ることを目的に調査を実施してきた。さらに、目的を考察する際の観点としては「風の人」と「土の人」の視点から鳥取を知る、〝なにもない〟鳥取の魅力という点に着目した。「風の人」「土の人」とは、田中輝美さんの著書『地域ではたらく「風の人」という新しい選択』（2015、ハーベスト出版）で紹介されていて、ある土地に根ざした地元の人を「土の人」と呼び、移住などで外から地域にやってきた人、よそものを「風の人」と呼んでいる。この両者が交流することで「風土」が形成されていき、さらにその風土から文化がつくられるのではないかと私たちは考えた。

具体的な活動として、文献調査、移住者へのインタビュー調査、地域住民・移住者・行政の３つの立場による公開鼎談を行った。

文献調査は、平田オリザ『下り坂をそろそろと下る』（2016、講談社）、本田直之『脱東京：仕事と遊びの垣根をなくす、あたらしい移住』（2015、毎日新聞出版）、山崎亮・NHK「東北発☆未来塾」制作班『まちの幸福論：コミュニティデザインから考える』（2012、NHK出版）、岸政彦・石岡丈昇・丸山里美『質的社会調査の方法』（2016、有斐閣）の４冊を基本文献として輪読し、移住や質的社会調査の基礎知識について学んだ。

インタビュー調査は、移住を経験した方々に移住のきっかけ、その後の生活や移住者から見る鳥取の魅力を伺うという趣旨で実施した。手始めに、まちづくり班全員で鳥取駅近くにある「Y Pub & Hostel」を訪れ、経営者の蛇谷りえさんにお話を伺った。

Ｙでのインタビューの様子

蛇谷さんは大阪から鳥取へ移住し、湯梨浜町にカフェ機能もあるゲストハウス「たみ」を2012年にオープンし、鳥取市にも2016年に「Ｙ」をオープンした。蛇谷さんはこれらのゲストハウス運営のほかにも、アートプロジェクトの企画、コーディネート業務、文化事業のコンサルティングなどさまざまな活動を行っている。蛇谷さんにお話を伺うことにより、鳥取での仕事の難しさと、鳥取でやることの魅力について学んだ。

その後に行ったインタビュー調査の手順は以下のとおりである。まず、鳥取県への移住者をインターネットなどで検索し、自分たちが会いたいと思う人をリストアップし10名に絞り込んだ。移住者１人に対して学生３人のグループに分かれ、それぞれの移住者に依頼文書を作成して郵送した。文書を送った方々全員に快諾していただき、日程調整を行ってから学生だけで10名の方々にインタビューを実施した。このインタビューの中で〝なにもない〟という言葉を多くの移住者から聞いたので、その後の活動テーマに決めた。

地域住民・移住者・行政の３つの立場による鼎談では、株式会社中井脩代表取締役社長の中井太一郎さん、移住者であり「もちがせ週末住人の家」を運営する鳥取環境大学大学院生の岩田直樹さん、鳥取県元気づくり総本部元気づくり推進局とっとり暮らし支援課課長補佐の野坂明正さんに鳥取大学までお越しいただいた。この公開鼎談により、内側と外側両方の視点で鳥取を見つめなおし、魅力と課題を考察した。

２．鳥取県の移住者に関する基本データ

ここでは、19ページ以降で詳述する公開鼎談当日、野坂さんから教えていただいた内容を示す。

鳥取県では、鳥取県へのＩターン、Ｊターン、Ｕターン者8,000人の実現に向けて多様な取り組みを行っており、大きく２つに分けることができる。１つ目は、移住・移住者に関する相談・情報発信体制の充実を実現することだ。具体例として、移住定住サポートセンターの設置、市町村専任相談員の設置の支援、鳥取県田舎暮らし住宅バンクシステムの運用などが挙げられる。２つ目は、市町村の移住・移住者に関する取り組み強化への支援を促進することだ。移住者目線での支援を充実できるように、空き家改修等への支援、お試し住宅の設置の支援、移住者をきめ細やかにサポートする受入体制づくりなどを実施している。

ここで注目したいのは、目標を達成するために単に移住者を増やせばいいというわけではないということである。移住した人がその後、地域になじめないような状態に陥り、結果的に元の場所へ帰ってしまうこともある。そのような事態にならないように、行政の立場から移住後のサポートをしていくことが重要になってくる。

次に、鳥取県が行った取り組みの成果について述べていく。鳥取県が掲げた平成23年度から26年度の移住者数

の目標は2,000人だったが、結果は目標を大きく上回り４年間の累計は3,418人となった。さらに平成21年度から26年度の期間をみると、鳥取県への移住者数は4,344人で全国１位となった。

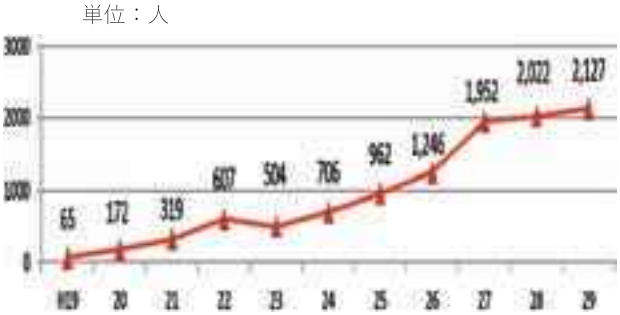

図１：鳥取県への移住者数の推移
（資料提供：鳥取県とっとり暮らし支援課）

図１に示されているとおり、鳥取県への移住者数は平成19年度に65人であったのに平成29年度は2,127人と過去最多となっている。この結果は、行政による相談・情報発信体制の充実や市町村の取り組み強化への支援の成果であると言える。平成30年度上半期の状況をみると移住者数は954人で、前年度上半期933人から微増している。現在の目標は平成27年度から31年度の５年間で移住者8,000人と定めており、平成30年度上半期までの移住者数は7,055人なので、目標達成まで残り945人となっている。

次に、今後の移住定住推進に向けた取り組みの考え方について紹介する。県は移住定住推進に向けて「交流人口」「関係人口」「定住人口」に注目しているという。交流人口とは、地域にあまり関わりのない人や観光旅行者などのことである。関係人口とは、地域にルーツがある人、その地域で勤務経験や居住経験のある人、あるいはその地域を行き来する人（前述した「風の人」）のことである。定住人口とは、定住者（住民、前述した「土の人」）のことである。

県としては、長期的な定住人口の拡大のみに注力するのではなく、地域や地域の人々と多様に関わる関係人口の拡張を意識するとともに、将来の関係人口層に移行する可能性を潜在的に秘めている交流人口の拡張にも力を入れていくことが重要だと考えている。そうすることによって、鳥取の良さを感じている人々の移住定住の増加につながっていくだろう。鳥取に魅力を感じて興味をもった「交流人口」層が、より関係の深い「関係人口」層へ移行し、さらに「定住人口」層へと発展していく形態が理想的だと考えられる。

３．文献調査

私たちはインタビュー調査に先立って、事前に以下の本４冊を輪読し、移住の現状や調査の方法に対する理解を深めた。

３−１．岸政彦・石岡丈昇・丸山里美『質的社会調査の方法：他者の合理性の理解社会学』（2016、有斐閣）

本書では、質的調査の種類や方法について詳細に書かれている。質的調査とは特定の問題について、特定の状況で特定のデータを得るための調査方法であり、フィールドワークや生活史法などのさまざまな調査方法が存在する。アンケート調査や統計的調査などの数字を扱った調査を行う量的調査に対し、質的調査は人々と関わっていく調査であると言える。私たち「まちづくり班」は今回、質的調査であるインタビュー調査を用いたため、この文献から質的調査を進める上で重要なポイントを学ぶことができた。本書のポイントとしては「ほしいデータに応じて適切な調査方法を選ぶこと」や人々の不合理に見える行為の合理性や理由の解釈を、その人ではなく「その人が対峙する世界から理解しようとする姿勢が必要」であるということが考えられる。

３−２．平田オリザ『下り坂をそろそろと下る』（2016、講談社）

本書では、高度経済成長を経て先進国となった日本が現在、衰退の一途をたどっており、それに対し個々人や自治体はどのような対処をしていくべきなのかが書かれている。地方創生においては日本が、①工業立国ではない、②成長社会ではない、③アジア唯一の先進国ではない、という３つの寂しさを受け入れ、向き合うことが必要であるとされている。またＩターン・Ｕターン者のうち、とくに子育て世代は教育環境の整った地域を選ぶため、移住者を求めている地方こそ、教育政策と文化政策を連動させ、文化資本が蓄積されるような新しい教育プログラムの開発が必要であるという。地方

では、付加価値を生み出す人材の不足や地域教育の段階から付加価値を生みにくい構造などの課題が存在しているため、上記のような教育改革を行うことによって地方が注目される可能性があるとされている。本書のポイントとしては「目を逸らしがちな、自国の弱点と向き合うことが大切」「自らの地域に価値を見出すことができる能力を養う教育」などが挙げられる。

3-3．本田直之『脱東京：仕事と遊びの垣根をなくす、あたらしい移住』(2015、毎日新聞出版)

本書では、移住を考える若者の増加に注目し、移住者が生活の中で感じていることや新しい移住で成功するために必要な22のスキルについて書かれている。著者によれば、若いクリエイターが地域で活躍することによって新たな雇用が生まれ、地域が活性化するという。また外から来た人の方がその地域の魅力がわかるため、移住者の存在が地域を魅力的に変えるとも書かれていた。移住者は「人とのつながりの大切さ」や「新しいこと・好きなことにチャレンジできる」「地元の良さに改めて気づいた」などを感じていることから、移住という行為は移住者本人だけでなくその地域に対しても影響を与えることが改めてわかった。半面、移住は簡単なことではなく、発信力やチャレンジ精神などさまざまな能力が必要であると指摘している。本書のポイントとしては「地方だからこそできることがある」「地域には私たちが気づけていない、移住に向いている良いところがたくさんある」などが考えられる。

3-4．山崎亮・NHK「東北発☆未来塾」制作班『まちの幸福論：コミュニティデザインから考える』(2012、NHK出版)

本書では、集落の消滅に焦点を当て、その解決策について書かれている。集落が消滅する原因を、課題に取り組むことができる住民がいなくなってしまうことによる「自然消滅」であるとし、その解決策としてコミュニティをデザインすることが必要だという。コミュニティ活動とは「やりたいこと」「できること」「求められること」を組み合わせて実行されるもので、そのために自然消滅への有効な解決策であるとされている。本書のポイントとしては「まちづくりにおける住民、特に若者の重要さ」「まちを変えていくことはまちの個性や人を大切にしていくこと」などが考えられる。

4．移住者へのインタビュー調査

ここではインタビューを行った移住者の方々を、以下の３つの移住形態ごとに分類して紹介する。

【Ｉターン】：都市（生まれ故郷）から地方へ移住すること

【Ｊターン】：生まれ故郷から都市へ移住した後、故郷に近い地方都市へ移住すること

【Ｕターン】：生まれ故郷から進学や就職を機に都市へ移住した後、再び故郷へ戻ること

表１：インタビュイー一覧

Ｉターン	Ｊターン	Ｕターン
岩田直樹さん	川原栄次さん	岡野壮人さん
田中泰子さん	藤田美紀子さん	田中信宏さん
森川寛史さん	西村公明さん	山根大樹さん
横山貴俊さん		

4-1．Ｉターン

インタビューを行った中でＩターンの分類に入るのは以下の４名だった。

１人目は岐阜県から鳥取県用瀬町へ移住し、もちがせ週末住人の家で民泊を運営する岩田直樹さん（岩田さんには後述の鼎談でもゲストとして登壇していただいた）。２人目は東京都から鳥取県岩美町に移住しシェアハウス「TACOBUNE」を営んでいる田中泰子さん。３人目は大阪府から鳥取県鳥取市に移住し、中学校で音楽の非常勤講師をしている森川寛史さん。４人目は大阪府から鳥取県岩美町に移住し、レストラン「アルマーレ」で働いておられる横山貴俊さんである。

ここでは田中泰子さんへのインタビュー内容を中心にまとめていく。

○田中泰子さん：８月30日シェアハウスTACOBUNE（鳥取県岩美町）にてインタビュー

田中さんは東京都出身で、2012年に初めてご主人の実家である鳥取を訪れ、その後に

岩美町へ移住された。理由は東京にしか住んだことがなく、せっかく環境を変えるなら都会ではないところに住みたいという希望があったからだという。また、移住を考えていた同時期に岩美町で地域おこし協力隊１期生の募集があることを知り、そのことも移住を決めるきっかけになった。

田中さんが移住したのとほぼ同時期に、岩美町を舞台としたアニメ「Free！」が始まり、アニメを活かした観光振興も行っているとのこと。さらに、シェアハウス「TACOBUNE」や、岩美町への移住者仲間と設立した「うみねこ舎」、コミュニティ・カフェ「ニジノキ」のオープンなど、さまざまな活動に携わっている。

田中さんは「鳥取には生活の豊かさ」があるとおっしゃった。ここでいう「豊かさ」とは、「暮らしの基本的な部分を感じられる」ということであり、豊富な旬の食材、自然豊かな季節の移ろい、住民同士の助け合いやつながりなどを意味する。これらを感じられることに幸せを見い出しているそうだ。また、観光と暮らしをつなぐ部分にも楽しみがあるという。たとえば、田畑の作物の成長を体感することは都会から訪れた観光客にとっては非日常で魅力的であると同時に暮らしの豊かさをも示しているのだ。

「まちの魅力とは人の魅力」とおっしゃっていたことも印象的であった。どんなに自然環境が豊かであっても、そこに会いたい人がいるかどうかが重要なのである。田中さんが移住した岩美町にもたくさんの魅力的な人がいるという。

また、シェアハウスの活動を行っていく際に自治会長や地域の人々がオープンに受け入れてくれたそうだ。アニメ「Free！」についても岩美町の住民で観ている人はほとんどいないらしいが、それでも住民はきっかけが何であれ、遠方から岩美町に来てくれることがうれしいと、あたたかく接している。

Ｉターン者へのインタビューでは他にも以下のような意見があった。まずどの方も自然や人の良さ、面白さを述べていた。しかし受け入れてくれる側がオープンな場合もあれば、少し壁があると思われることもあるという。そのためお祭りに参加したり、漁の方法や作物の栽培方法を教えてもらったり、自分から積極的に関わるよう努力していたそうだ。移住者同士の交流もよく行われているらしい。先に移住した方の活動に興味をもって移住してきた方もおられ、移住者同士が連携していく活動はさらに増えるだろうという。もっとも印象的だったのは「鳥取には〝なにもない〞がある」という言葉だ。似たようなニュアンスの言葉を他の移住者も言っておられた。〝なにもない〞から何でもできるし、都会と違って誰も試みていないことだから応援もしてくれやすいという意味で用いられていた。

４−２．Ｊターン

インタビューを行った中でＪターンの分類に入るのは以下の３名だった

１人目は兵庫県から京都府、鳥取県伯耆町へと移住し、染色家をしている川原栄次さん。２人目は兵庫県から大阪府、鳥取県伯耆町へと移住し、コウボパン小さじいちというパン屋を営む西村公明さん。３人目は神奈川県、東京都、ドイツの後、鳥取県鹿野町へと移住し、画家をしている藤田美紀子さんである。

ここでは西村公明さんへのインタビュー内容を中心にまとめていく。

○西村公明さん：７月24日、コウボパン小さじいち（鳥取県西伯郡伯耆町）にてインタビュー

西村公明さん・あゆみさん

西村さんは、鳥取県で有名な大山の近くでパートナーのあゆみさんと従業員数人とともにパン屋を営んでいる。もともと兵庫県姫路市に住んでいた西村さんは、大阪の中心部で仕事に明け暮れる日々を送っていたという。その後、脱サラをしようと考えて関西周辺の田舎を調べ、姫路市の山間部に移り住む。そこで、一定期間の修行を経て友人夫婦と共同でパン屋を開業。数年間がんばって資金を貯めてお互い独立することになった。そんなとき、あゆみさんの実家のある鳥取県米子市からの移動中、たまたま大山付近を通り、その美しい風景などが忘れられなくなって移住を決意された。

脱サラしたときは「何でもできる」という自信があったため、パン屋を始めることに対して一切不安はなかったと西村さんはいう。しかし現実は厳しく、鳥取での開業当初は厳しいこともあったそうだ。

パンは店名のとおり天然酵母を利用したもので、日々試行錯誤を繰り返し、ようやく自分で納得できるパンをつくれるようになった今、わざわざ県外から来てくれる常連さんをもつほどの人気店となっている。

２人の子どもを育てる西村さん夫妻は、鳥取での生活についてもいろいろ話してくださった。移住した当初は

「コウボパン小さじいち」店内の様子（瓶の中は天然酵母）

子育てに対する行政からの補助はなかったが、近年は手厚い支援制度が整備されて、不安が解消したという。また、地域には西村さん以外にも多くの移住者がおられ、その多くが自営業を始めたいなど意識の高い人たちだそうだ。しかしながら、「勢いだけで移住してしまうと志半ばで挫折してしまう恐れがある。移住してそのまま残る（定住する）人は、残念ながらほんのわずか」とおっしゃっていた。「移住を勧めるか？」という質問に対しては、「つい素敵な自然環境や田舎暮らしというものにあこがれがちだが、もっと生活自体を考えるべき。ある程度の強い意志が必要」といい、さらに「生活や人間関係、仕事、自らの意志、支援などさまざまなバランスがとれると移住は成り立つ」とのこと。しかし、そう言いつつも「一生懸命やっていたら周りも助けてくれ、なるようになる。そのためにも自分が打ち込める活動や仕事をすべきだ」と笑顔でおしゃっていた。この「なるようになる」という言葉は、西村さん自身のこれまでの経験が生んだ貴重な意見であると感じられた。

Ｊターン者へのインタビューでは、他にも以下のような意見があった。鳥取では田舎らしさと都会の雰囲気の両方を味わうことができる、子育て支援政策や観光政策の充実など知事をはじめ行政職員や議員も鳥取県を良くしていくことに前向きな姿勢である、海も山も近く両方を楽しむことができる、深い人付き合いができるなどである。

Ｊターン者から伺ったさまざまな意見の中でもっとも印象的だった言葉が、Ｉターン者へのインタビューと同様、〝なにもないこと〟が魅力的であるという点だった。

４−３．Ｕターン

インタビューを行った中でＵターンの分類に入るのは以下の３名だった。

１人目は鳥取県倉吉市から、ヴァイオリン製作の修行のため東京、フランスへと移住し、その後鳥取県三朝町で三朝ヴァイオリン美術館の館長兼鳥取ヴァイオリン製作学校の校長を務めている岡野壮人さん。２人目は鳥取県から神奈川県、長野県に移住した後鳥取県に戻り、現在は山陰地方の民芸・工芸品を扱うお店「COCORO STORE」のオーナーを務める田中信宏さん。３人目は鳥取県から兵庫県に移住した後鳥取県に戻り、株式会社Treesを経営している山根大樹さんである。

ここでは山根大樹さんへのインタビュー内容を中心にまとめていく。

○山根大樹さん：７月10日、cafe SOURCE（鳥取県鳥取市）にてインタビュー

山根大樹さんは鳥取県から兵庫県へ移住後、鳥取県へ戻り、現在は株式会社Treesの代表取締役社長を務め、鳥取市の「cafe SOURCE」をはじめ県内でカフェや飲食店計９店舗を経営されている。今回のインタビューで、ご自身のＵターンのきっかけや鳥取県の魅力、移住についてのお考えなどを伺うことができた。

山根さんは兵庫県の大学進学をきっかけに、鳥取を離れることになった。学生時代にカフェ文化に魅了され、そのまま兵庫県のカフェに就職したものの、実家の商売を手伝わざるを得なくなって帰郷することになる。

帰郷後に実家の商売を手伝いながら自分でカフェをオープンさせた頃、鳥取の魅力を改めて感じるようになったという。兵庫県ではさまざまな文化が存在しており、その中で独自のものを生み出していくのは難しかった。一方、当時の鳥取ではカフェ文化というものを見てもそれほど広まっているとは言えなかった。ほぼゼロの状態から自分の手で何かを生み出していくことができるのは地方都市ならではのことであり、そういった点で山根さんは鳥取県に魅力を感じたのだという。現在では鳥取県にも数多くのカフェがオープンするようになり人気も高まっているが、山根さんはここ鳥取のカフェ文化の草分け的存在として紹介されることも多い。

移住に関して山根さんに質問したところ、肯定的に捉えており、積極的に行っていくべきだと考えているそうだ。理由は、移住者は暮らし始めた地域を客観的に見ることができ以前から暮らしている人とは異なる視点で物事を捉えられること、その土地や人間関係におけるしが

らみも少ないため思い切って物事に取り組めることだという。また、山根さん自身が経験されたように、生まれ育った場所でも一度離れて客観的に見つめ直すことによって新たな発見や考え方が見つけられるということも、貴重な意見だと感じられた。

他のUターン者へのインタビューをまとめると、Uターン者全員が最初から地元が好きだというわけではないということがわかった。また、「変えていきたい」という思いをもち、豊富な経験を活かしていきたいと考えられていることもわかった。一度地元を離れ、外からの視点に立って地元を見たとき、内からの視点では気づくことができなかった魅力に気づくことができるという。

4-4．インタビュー調査まとめ

外から見た鳥取県の魅力を探るという趣旨でインタビュー調査を行い、10名の方々にそれぞれの経験や考えについてお話を聞くことができた。その中で印象的だったのは鳥取に移住してきた経緯は人それぞれだったにも関わらず、どの方も鳥取という地域を愛し、魅力を感じているということだ。とくに豊かな自然や人付き合いの深さ、新たな挑戦や経験を生かせる機会の多さなどは多くの方が魅力的だと話していた。このインタビュー調査によって私たちは移住者の視点から見た鳥取の姿についてより深い理解を得ることができた。

調査を終えて、次に私たちが設定した目標は「実際にこれらの移住者に対して地域の人々はどのように感じているのか」と「移住者に対し行政はどのような取り組みやサポートを行っているのか」という２点について明らかにすることだった。また、インタビュー内で多くの方が語った「〝なにもない〞がある」という言葉のもつ意味について全体で考察を行っていく必要性を感じた。

5．考察

移住者の方々へのインタビューをふまえて、ここで一度考察を行った。私たちは移住者一人ひとりのインタビュー内容を振り返り、班員それぞれがインタビューの中で印象に残った言葉やキーワードを付箋に書き起こして話し合うワークショップの時間を設けた。その結果私たちは、多くの移住者の表現の中に１つの共通点を見つけた。それが「鳥取には〝なにもない〞」という表現である。4-2で紹介したコウボパン小さじいちの西村さんをはじめ、細かなニュアンスの違いはあるが、同じような内容のことをほとんどの移住者が話していたのだ。移住者の方々はなぜこのような表現をしていたのだろうか。そして〝なにもない〞という言葉の裏にはどのような意味が込められているのだろうか。ここではこの２点について掘り下げていく。

今回インタビューを行った移住者の方々は、偶然にも全員が都会出身者、または地方出身であっても一度は都会暮らしの経験のある方々であった。そこで移住者の方たちが「鳥取には〝なにもない〞」というのは都会と田舎、地方である鳥取とを比較してのものではないかと私たちはさらに考え、都会と鳥取の違いについて３つの側面から違いを見つけることで「鳥取には〝なにもない〞」の意味を話し合った。

比較した結果、都会と鳥取の違いは表２のようになった。

表２：都会と鳥取の比較

	都会	鳥取
商業施設	多い	少ない
交通網	発達している	整備されていない
職種	多い	少ない

このように表にしてみると、商業施設・交通網・職種のどれをとっても都会の方が便利で魅力的にみえる。確かに鳥取はマイナス面が多く、〝なにもない〞という印象を受ける。よって移住者の方々が言う「鳥取には〝なにもない〞」にはその言葉の裏に都会と鳥取を比較して〝なにもない〞という意味が込められているということがわかる。しかしながら、移住者の方々、すなわち「風の人」はそのような意味で「鳥取には〝なにもない〞」というだけではなく、表からわかるような鳥取のマイナス面を次のように捉えていた。

移住者の方々は、確かに「鳥取には〝なにもない〞」とおっしゃるが、〝なにもない〞からこそそこにはチャンスが多く何事にも挑戦しやすい環境があるともいう。また、人口が少ないからこそ、地域住民の横のつながりが強く、強いからこそ地域で子どもを見守る環境が整っており、子育てもしやすい。さらに都会と違って自然が豊かで、おいしく新鮮な食材が豊富にある。

このようなことから、私たちは「鳥取には〝なにもない〞」とは「鳥取の魅力の裏返し」なのではないかという仮説を立てた。

6．公開鼎談 「鳥取の〝なにもない〞を考える」

考察の内容をふまえて、多くの移住者の方から聞くことができた〝なにもない〞についてさまざまな視点から深めようと考え、移住者・地域住民・行政の３つの立場による公開鼎談を主催した。

鼎談のテーマとして「鳥取の魅力」「３つの立場」「〝な

鼎談の様子

にもない″について」の３つを設定し、３人のゲストスピーカーに話し合っていただいた。公開鼎談の詳細は以下のとおりである。

日　時：2018年12月７日（金）15：30～17：30
場　所：鳥取大学地域学部棟アートプラザ
ゲスト：移住者…岩田直樹さん
（鳥取環境大学大学院１年、
「もちがせ週末住人の家」運営）
地域住民…中井太一郎さん
（株式会社中井脩代表取締役社長）
行政…野坂明正さん
（鳥取県元気づくり総本部元気づくり推進局
とっとり暮らし支援課課長補佐）
キーワード：〝なにもない″

野坂明正さん

中井太一郎さん

6－1．鳥取の魅力

１つ目のテーマ「鳥取の魅力」について、３人の意見は、以下のとおりである。

○岩田さん
→顔の見える関係がある
○中井さん
→素晴らしいヒト・モノ・コト
○野坂さん
→住みやすい　海山近くアウトドア、キャンプ、海水浴など

このテーマでは、地域住民という立場で登壇していただいた中井さんの「素晴らしいヒト・モノ・コト」という言葉がとくに印象的だったため、この言葉を中心としてまとめていく。「ヒト」とは、地域住民のあたたかさを指す。鳥取には、地元を離れても、帰ってきたときはいつでも受け入れてくれるあたたかさがある。また、さまざまな取り組みをする人々やグループ同士がどこかでつながっていて、すぐに会うことができるという「顔の見える関係」があることも１つの魅力として挙げられる。「モノ」とは、素晴らしい自然や食べ物のことを指す。たとえば、夏は海水浴に、冬はスキーに行くことができるロケーションや、ミシュランでも評価される店があるなど、称賛されている美味しい食べ物、また鳥取ならではの伝統的な食べ物が挙げられる。そして「ヒト」と「モノ」をつなぐ「コト」の存在が重要であるという。「コト」は経験のことを指す。つまり経験が、鳥取でなければならないという魅力を高めていると言える。地域のあたたかさや素晴らしい自然や食べ物は他地域にも存在するが、「誰かと体験する」ということも含めて、これらが鳥取の魅力となる。

6－2．３つの立場

このテーマでは、移住者、地域住民、行政がお互いについてどう感じているかについて話し合っていただいた。それぞれの立場から出た意見は、以下のとおりである。

○岩田さん（移住者）
→地域住民・行政に対し…同じ課題を共有する仲間のような存在
○中井さん（地域住民）
→移住者に対し…積極的な地元参加
行政に対し…情報発信の強化、支援の充実
○野坂さん（行政）
→地域住民に対し…がんばる地域を応援したい
移住者に対し…地域と一緒に関われる関係

話し合いの結果、皆さんが鳥取に課題があることを認識されていることが判明した。その中で岩田さんは、お互いが同じ思いを持っており、仲間のような存在であるとおっしゃっていた。中井さんは移住者に対して積極的な地元参加を求めておられた。移住とは言うなれば新しい人生のスタートであり、積極的な地元参加は移住者だけでなく、地域住民のためにもなるとおっしゃっていた。一方、行政に対しては、手厚い政策があるのにもかかわらず、あまり知られていないため、さまざまな場での情報発信を求めていた。野坂さんは、地域の方に対しては、行政だけががんばっても鳥取県は盛り上がらないため、がんばっている地域の人をバックアップすることで、一緒に盛り上げていきたいとおっしゃっていた。移住者に対しては、地域に関われる関係性になることを望んでいた。

岩田直樹さん

また、これらの話し合いから、移住者が、地域とどのように関わっていけばよいかという話題になった。岩田さんは移住して感じたことをこう述べている。「起業するためにはスピード感をもっていろいろな人と関わっていかなければならない、しかし地元の人と足並みをそろえていかないといけないこともある」。これは起業していくにはスピード感だけでなく協調性が必要であるということであり、岩田さんの言葉に対し中井さんは、「お互いを助け合ってサポートしあうこと、鳥取県の濃いコミュニケーションも魅力の１つ」。野坂さんは、「少しおせっかいな部分もあるが、地域の人に覚えてもらうことでさらによくしてもらえる」と、述べていた。このように、中井さんも野坂さんも移住者の方に積極的な地元参加を求めておられた。

6−3．〝なにもない〞について

このテーマでは鼎談のタイトルにもある〝なにもない〞について、どのような印象をもっているかを話し合っていただいた。それぞれの立場から出た意見は、以下のとおりである。

○岩田さん
　→自分で課題を見つけ、なんでもできる
○中井さん
　→１つの大切な良さ、どう生かし発信していくか
○野坂さん
　→新しいものの創出、関わっていく余白

３人とも〝なにもない〞に対してポジティブに捉えており、どのように生かしていくかが重要である、と話していた。そして、〝なにもない〞とは、あくまでも首都圏と比較してのものだという意見も出た。たとえば人口をみると、１人あたりが首都圏では５千万分の１なのに対し、鳥取県では56万分の１であり、そこに関わっていく余白が広く存在すると言える。また、ここまでで挙げたような魅力は、地域住民にとっては良い悪いではなく、「当たり前」のものと捉えられているため「なにもない」という表現につながってしまうのではないか、と考えられる。

6−4．鼎談のまとめ

ここで、キーワードとした〝なにもない〞について鼎談の内容をまとめる。移住者などの外から来た人が鳥取に感じる目新しさや魅力は、そこに元から住んでいる地域住民からすれば「日常」であり「当たり前」のことである。したがって魅力が身近なものであることに慣れてしまっており、改めて良さを認識することが困難になっていると考えられる。このように、「当たり前」の「日常」である「なにもない」に浸りきっていると、自分からわざわざ「当たり前」の情報を発信することがなくなってしまう。それどころか、「当たり前」という認識こそが、地域住民を鳥取と大都会とを比較する見方に縛ってしまうだろう。しかし、地域住民は「（鳥取には）〝なにもない〞よ」と自虐的になってはいるが、実際には鳥取での生活に満足しており、これ以上のものを望んでいないために「（鳥取には）〝なにもない〞よ」という表現になってしまっているのではないだろうか。

このことから、地域住民がありのままの鳥取の魅力、つまり〝なにもない〞鳥取の魅力に改めて気づくためには、移住者など外から来た人々が、地域住民に対して鳥取の魅力を言葉で伝えること、鳥取に対する意見を積極的に発信していくことが重要だと考えられる。そのような外からの新発見を改めて伝えることが、地域住民による地域の再発見に貢献するのではないだろうか。そして、地域住民にとって地域の魅力の再発見が、「当たり前」と感じていた鳥取に対して、再び自信や誇りをもつきっかけになるとも言える。さらにその誇りから、地域住民が他の地域へ、自分たちの地域の魅力を発信していくようになることが必要である。それが、新たなイベント開催や起業、観光業など、地域の活性化や新しい地域文化の発掘・発展につながるのではないかと考える。

7．おわりに

今回、私たちは移住に焦点を当て、鳥取の価値・魅力

を知ることを目的とし、その際の観点を「風の人」と「土の人」の視点から鳥取を知る、〝なにもない〟鳥取の魅力の２点に設定し調査を進めてきた。実際に移住者の方々へのインタビューや異なる立場間での公開鼎談を通して、一方の視点からだけでなく、異なる視点から移住について学ぶことができた。

鳥取県とっとり暮らし支援課の野坂明正さんのお話を伺い、さまざまな移住者や移住を考えている人にとって魅力的な制度や補助が存在し、実際に近年は鳥取県への移住者数が増加していることもわかった。

また、インタビュー調査を通して多くの移住者の方から聞くことができた〝なにもない〟という言葉についても、外の視点と内の視点からでは捉え方が異なっていた。外の視点から見た場合、〝なにもない〟ということはチャンスの多さなどと捉えられており、比較的プラスの意味をもっていたと言える。しかし内の視点から見たとき〝なにもない〟とはその言葉どおり、比較的マイナスと思われるような意味をもっていると考えられる。確かに地域の人にとって「当たり前」の「日常」となっている〝なにもない〟は、地域の人々が改めてそれを魅力の１つだと感じることはむずかしい。そこで重要となるのが「風の人」による外の視点と発信である。外の視点によって得た魅力の新発見を積極的に発信していくことを通じて、それが「土の人」にとって魅力の再発見につながっていく。こうした「風の人」と「土の人」との関わりがその土地の風土を形成し、新たな文化が生まれるのだと感じた。

今回、さまざまな調査を経験したことによって移住やまちづくりについて学ぶことができた。とくに〝なにもない〟という言葉が捉え方によってプラスとマイナス両方の意味をもっていたように、その言葉の背景まで考える必要があることを知った。これらの経験は大学内だけでなく、自分たちの現在の生活や将来についても具体的に考えていくヒントとなった。

最後に、今回の調査の際にご協力いただいた多くの方々に、この場を借りてお礼申し上げることで報告の締めくくりとさせていただきたい。

【ご協力いただいた方々】

岩田直樹さん、岡野壮人さん、川原栄次さん、蛇谷りえさん、田中信宏さん、田中泰子さん、中井太一郎さん、西村公明さん・あゆみさん、野坂明正さん、藤田美紀子さん、森川寛史さん、山根大樹さん、横山貴俊さん

【参考文献】

岸政彦・石岡丈昇・丸山里美（2016）『質的調査の方法：他者の合理性の理解社会学』有斐閣

田中輝美・法政大学社会学部メディア社会学科藤代裕之研究室（2015）『地域ではたらく「風の人」という新しい選択』ハーベスト出版

平田オリザ（2016）『下り坂をそろそろと下る』講談社

本田直之（2015）『脱東京：仕事と遊びの垣根をなくす、あたらしい移住』毎日新聞出版

山崎亮・NHK「東北発☆未来塾」制作班（2012）『まちの幸福論：コミュニティデザインから考える』NHK出版

Ｕターン／Ｊターン／Ｉターン｜田舎暮らし特集　https://www.iju-join.jp/feature_cont/guide/003/02.html（2019年１月25日閲覧）

「Ｕターン」「Ｊターン」「Ｉターン」とは？　https://www.creativevillage.ne.jp/21854（2019年１月25日閲覧）

鳥取の“なにもない”を考える
～地域住民×移住者×行政～
移住者が口々に言う「なにもない」とは何か。
「魅力があるの裏返し」としての「なにもない」について、
３つの立場を交えて鼎談していただきます。
ゲストスピーカー
株式会社中井産
代表取締役社長
中井太一郎
鳥取環境大学大学院生
岩田直樹
鳥取県
元気づくり総本部
元気づくり推進局
とっとり暮らし
支援課
日時　2018 年 12 月 7 日(金)　15:30～17:30
場所　鳥取大学地域学部附属芸術文化センター アートプラザ
主催　鳥取大学地域学部国際地域文化コース
企画運営 地域調査プロジェクトまちづくり班　問合せ kawaida@tottori-u.ac.jp

公開鼎談のチラシ